

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12849

研究課題名（和文）奈良尾花劇場にみる映画興行の展開：サイレント期から戦後期までの映画の地方文化研究

研究課題名（英文）Regional Study of Japanese Film Exhibition: A Case of Nara Obanagekijo

研究代表者

柴田 康太郎（Shibata, Kotaro）

早稲田大学・文学大学院・日本学術振興会特別研究員

研究者番号：00801060

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、大阪中野商会在奈良で経営した映画館（電気館、尾花劇場、キネマ電気）の経営資料を考察することにより、奈良の事例を通して地方都市における映画興行の実態、およびそれを支える映画供給体制の形成過程を浮かび上がらせた。帳簿資料の分析においてはサイレント時代の地方都市の映画館の実態を捉えるとともに、その変容過程を明らかにした。1920年代半ばまでに奈良では少しずつ映画館が増加し、映画館同士の競争が高まっていたが、中野商会は上映作品や弁士や音楽家の拡充を図って競争力を強化していった。サイレント時代の映画文化は、地方と都市との時間差や地域差を変容の契機としながら展開していたということが出来る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、大阪、神戸、京都、名古屋のような東京以外の大都市を事例に、従来の東京中心の「日本」映画史を読み直す研究が進められている。本研究は奈良という地方都市の事例を扱うことで、大都市の周辺でどのような映画文化の時間差や地域差があったのかを明らかにし、大阪中野商会や聯盟活動写真商会のような映画興行社や映画配給会社に光を当てた。この考察においては従来の研究で扱われなかったような映画館経営の実態を記録した帳簿資料の読解を進めることにより、大正期の地方都市における映画館の活況やその変容を明らかにし、「日本」映画史の実態を地方都市の視点から捉えることの重要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Examining the management documents of movie theaters (DenkiKan, Obana Gekijo, and Kinema Denki) operated by Osaka Nakano Shokai in Nara, this study shed light on the practices of movie theaters during the silent era and the formation process of the film distribution network that supported local movie exhibitions. By scrutinizing the account books of the theaters, it demonstrated the significance of exhibition practices, particularly the role played by the benshi (narrator) and musicians. Furthermore, it highlights Nakano Shokai's endeavor to present newer films and improve the quality of benshi and musicians during the 1920s, when new theaters opened in Nara and heightened the competition among the theaters.

研究分野：映画学

キーワード：奈良 映画興行 映画配給 サイレント映画 映画館 地域研究 地方都市

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の「日本」映画史が曖昧に東京の事例を中心に描かれてきたことへの反省から、近年、大阪、神戸、京都、名古屋、北海道など国内の大都市に注目した映画文化の地域研究(上田 2012; 笹川 2012; 板倉 2019 等)およびそれを支える映画配給の研究(近藤 2018)が進められている。もっとも、先行研究が大都市の事例を中心にしていることには注意も必要である。大正時代には、大都市と地方都市の間には上映作品や興行をめぐる状況においても地域差や時間差が大きく存在したからである。「日本」映画史の再検討のためには大都市だけでなく中小規模の地方都市や地域の検証を進める必要がある。

(2) ただし、これまで地方都市の映画館が考察されてこなかった背景には、文献資料にも記載がなく、同時代の関連資料も多くが失われているという資料上の限界があった。しかし幸い、尾花劇場等の映画館経営資料(ホテル尾花所蔵)は、大正期を中心に映画館経営の日常を記録した極めて貴重な資料である。電気館、尾花劇場、キネマ電気等の映画館の経営資料(以下、尾花劇場の数が最も多いため「尾花劇場資料」と呼ぶ)この尾花劇場資料については尾花劇場元館主の中野重宏の回顧録(2016)があり、また既に島田善博(2016)が調査を行っているが、この資料の考察を精緻化し、映画興行や映画配給といった視点から地方映画史をめぐる問いに回答して再検討していくべきである。

2. 研究の目的

このような背景のもと、本研究では当初、大都市と異なる地方都市の中小規模の映画館の興行実態をサイレント期から戦後期まで広く明らかにすることを第一の目的とした。またこの奈良の事例を、先行研究で考察された大阪、神戸、京都といった関西の大都市の映画館や映画文化との関係のなかで再考し、関西圏の映画配給や映画文化の流通の動態を明らかにすることが第二の目的とした。もっとも、コロナ禍のなかで調査に遅れが生じたことや、尾花劇場資料の再調査の結果、資料の9割近くがサイレント期のものであることが分かったため、第一の目的については時期をサイレント期に絞って考察を進めることとした。

3. 研究の方法

(1) 従来の地方映画史の研究は、新聞、書籍、雑誌、映画館プログラム等の文献資料によって試みられてきた。しかし本研究は、尾花劇場資料という映画館の経営資料を軸に考察を進める。同資料は尾花劇場や関連劇場の30冊を超える帳簿を中心とするが、多くがくずし字を含む手稿資料であることから、考察の前段階で資料の翻刻を行い、データ化した数値から入場者数の総計や興行成績の推移の検討を図った。もっとも映画館経営資料には含まれない歴史的状況に関する情報を補うべく、従来のように同時代の文献資料の調査・考察も行った。

(2) 歴史的資料の調査・分析によって映画興行そのものの検証を進めるとともに、当時の映画館の上映実態を捉え直すため、現代の弁士や音楽家に依頼してサイレント映画上映を試み、実践を踏まえてその歴史の検証を図った。

4. 研究成果

本研究は、戦前から戦後まで奈良県奈良市で映画興行を行った大阪中野商会による映画館(電気館、尾花劇場、キネマ電気)の経営資料を対象に分析することで、地方都市における中規模の映画館の興行実践を捉え、またこれを関西圏のその他の映画館の動向との関係のなかで考察することを試みた。

(1) 帳簿資料の記載年代、および帳簿の種別(水場帳簿、直利帳、切符売渡蝶、入場券発売帳、聯盟清帳、蔵入帳など)を調査し、年代順の資料種別の把握を行った。基礎調査の結果、資料の9割近くがサイレント時代、特に大正期の帳簿資料であることが分かり、興行内容の詳細が記された資料を中心に翻刻対象を選定した。この翻刻データをもとにした考察の精緻化を図り、文献資料では捉えにくい映画館経営の実像を捉えることとした。

1920年設立の尾花劇場は、1916年頃から映画館の経営や興行を行った中野商会の経営によっており、中野商会の経営による奈良電気館やキネマ電気等の資料を含んでいる。この検証のうえでは、奈良の映画興行をめぐる状況を踏まえたうえで、大阪を拠点に奈良に進出し、尾花劇場の興行を行った経営主体の中野商会の活動を捉え直し、また日活の聯盟活動写真商会のような映画配給会社の映画史的な位置付けを捉え、映画館の増加と映画配給体制の強化が進んだ1910年代末から1920年代半ばまでの地方映画興行の状況を考察した。なお、数々の帳簿資料によって構成される尾花劇場資料には、1930年代の帳簿資料は含まれていない。そのため、調査の過程では補完的に早稲田大学演劇博物館所蔵の京都松竹座関連資料の帳簿資料を検討し、戦時体制下で作成が推奨された帳簿のあり方を分析した。

尾花劇場資料における水場帳簿・直利帳・切符売渡蝶・入場券発売帳等の帳簿資料の分析を通して、大正期の映画館における興行の実態を捉えた。特に中野商会の経営による奈良の電気館、尾花劇場、キネマ電気の興行の変容過程を、入場者数、入場料金、公開作品、弁士・囃子およびその給金、あるいは広告手段など多角的な検討を進め、奈良という地方都市の映画興行および映画配給体制の形成・変容の過程の一端を明らかにした。

の研究成果は組み合わせて名古屋外国語大学で開催されたシンポジウム「モダン文化の場所：松坂屋、地方映画館、名古屋の洋楽」(2023年2月27日)の口頭発表「映画文化と地方都市：奈良尾花劇場資料を中心に」、および2023年6月の日本映像学会第49回大会での口頭発表「地方都市の映画館経営と映画興行：奈良尾花劇場資料を中心に」としてまとめた。

尾花劇場資料に含まれるトーキー争議関連資料については翻刻とともに周辺情報の検討を行った。この資料については島田(2016)によって多くが考察されているが、尾花劇場の争議にも関与した総同盟全関西映画演劇同盟のような労働組合のような広域的組織については中村正明(2017)の研究を踏まえて再検討を行った。この補完的調査として、法政大学大原社会問題研究所の『社会・労働運動大年表』データベースで公開されている映画館関連の労働争議資料の調査を行い、サイレント期からの映画館での労働争議における課題を考察したほか、トーキー時代の弁士をめぐる周辺調査の成果については、映画作品における語りの問題を検討し論文「トーキー転換期の日本映画における語りの再編成：解説版トーキー/浪曲トーキー再考」をまとめた。

(2)奈良電気館や尾花劇場は日活特約館として日活の旧劇映画、新派映画、輸入映画の三本立て興行を行っていたが、この旧劇映画や新派映画の上映の実態を捉え直す考察を進めた。この実践においては活動写真弁士の片岡一郎氏や邦楽演奏家の堅田喜三代氏らの協力を得た。

1910年代の日本映画は演劇映画ともいわれたほど舞台上演と極めて強い結びつきを持っていたが、現存フィルムがほとんど存在せず、その上映の実態は十分に明らかにされていない。まず尾花劇場資料に残る奉納額にも演目名が残る演劇「生さぬ仲」に注目し、同時代的な新派劇およびその映画作品を考察した。これに関しては早稲田大学演劇博物館所蔵の新派映画『生さぬ仲』(小林商会、1916年)および『うき世』(日活、1916年)の具体的な分析を行い、新派俳優である井上正夫および小林商会の映画『生さぬ仲』に関する論文「新派映画の複層性：舞台/連鎖劇/映画」をまとめた。また『生さぬ仲』と『うき世』それぞれのオンライン上映を実施するなかで、歴史的資料の検証結果を反映した。

次に旧劇映画に関する考察を行った。尾花劇場資料に含まれる映画説明台本『出世太閤一代記』(尾上松之助主演)の翻刻と分析を行った。この『豊臣秀吉一代記』(1923)と推定される台本からは、従来の資料ではほとんど明らかにならなかった声色弁士や説明弁士が連携して行った映画上映の一端を捉えることができる。これは大阪千日前の常盤座で活躍した弁士・吉田絶景による台本であり、同時代の映画説明と声色説明、囃子鳴物などとの組み合わせ方についての貴重な資料である。本研究においては、この台本の考察結果を、申請者の他の研究課題の成果と合わせて2022年11月に尾上松之助主演の旧劇映画『雷門大火 血染の纏』(早稲田大学演劇博物館所蔵、1916年)の上映企画に反映させ、歴史研究と歴史的上映実践の復元する試みを行った。また、これに関連する尾上松之助や映画琵琶等に関する同時代のSPレコードの音源に関して、ボン大学片岡コレクション研究会で2022年8月に口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柴田康太郎	4. 巻 44
2. 論文標題 トーキー転換期の日本映画における語りの再編成：解説版トーキー / 浪曲トーキー再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 演劇研究	6. 最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柴田康太郎
2. 発表標題 東京近郊の二番館、三番館の映画興行：後藤昌司寄贈資料における映画資料
3. 学会等名 演劇博物館所蔵、大正、昭和初期映画館チラシ、が埋める無声映画史の隙間
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴田康太郎
2. 発表標題 映画文化と地方都市：奈良尾花劇場資料を中心に
3. 学会等名 シンポジウム「モダン文化の 場所 : 松坂屋、地方映画館、名古屋の洋楽」 2023年2月27日
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 柴田康太郎
2. 発表標題 映画関連レコードと琵琶 / 浪曲
3. 学会等名 ボン大学片岡コレクション研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴田康太郎
2. 発表標題 地方都市の映画館経営と映画興行：奈良尾花劇場資料を中心に
3. 学会等名 日本映像学会第49回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 柴田康太郎
2. 発表標題 映画文化と地方都市：奈良尾花劇場資料を中心に
3. 学会等名 シンポジウム「モダン文化の 場所 : 松坂屋、地方映画館、名古屋の洋楽」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 後藤隆基・柴田康太郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	5. 総ページ数 144
3. 書名 演劇博物館秋季企画展図録「新派 SHIMPA アヴァンギャルド演劇の水脈	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果は、早稲田大学演劇博物館で実施したサイレント映画の復元上映に反映したほか、プレトークとして尾花劇場資料の考察の成果を交えた解説を行った。この上映の様子は収録のうえオンライン配信され、国内外に広く発信された。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------